

## Ⅲ、2007年投稿ブログ: 事実を知れば、 新たな市場要求(ニーズ)が生まれる

### 01. 科学的事実、あるいは予測

先週金曜日に発表された国連の IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change) のレポート(20ページのサマリー)をざっと読んだ。概要は朝日新聞にも記事が出ていたから、日本でも多くの人の眼にとまったことだろう。

地球の環境がますます悪くなっていることは、このレポートを読めば明らかだし、その環境悪化の主たる原因である地球温暖化(global warming)が人間の活動結果によるものであることは、明確に述べられている。温暖化は自然現象の一つだ、などとうそぶいていた人には、はっきりと宣告が出されたわけだから、その意味でも意義がある。

しかし、このまま続けば地球はどうなる、という予測に関しては、今回のレポートも妥協の産物で、あたりさわりのないところで収めてある。科学者間の意見の相違の取りまとめや、スポンサーである大国(日本も含む)政府の「ご意向」なども尊重せざるを得ないなかで出てきたものだから、「衝撃的」な予測はない。

さらにそれだけではなく、観測データという「事実」がまだ少ないため、ほぼ間違いなく地球はこうなる、という確たる予測も、「科学者」としては出せないのだろう。

結果として、このレポートを読む人は、「わあ一大変、だけどまだまだだいじょうぶ」という感想を持つことになるだろう。今世紀末に海面が50センチ上がってしようと、たいしたことではない、と誰もが思うだろう。その意味でこのレポートは極めて危険なレポートとなっている。

科学データがまだ少ないからといって、まだなんともいえませんといっている内に、時はどんどん流れ、データが積みあがって、やはり地球は壊れます、と「確信」を持って報告される時にはもう手遅れとなる。「科学的事実」と「予測」の間に何かが欠けている。科学者の他に別の人種が報告に加わる必要がある。

これまでにない新規のアクションを起こそうという時には、そのアクションを裏付ける事実データはほとんど存在しないのが普通である。昔、私が商品企画を職業に

していた時、企画審議会で、企画提案の根拠となるデータを示せ、と重役から要求されたことがある。この分野のこの商品がいける、とデータが示せる時は、競争会社が先行しているときだから、それまで待ちますか、と皮肉を言った覚えがある。心の中で「馬鹿は死んでも直らない」とつぶやきながら。

今回のレポートで決定的に不足しているのは、マイナスのスパイラルが始まると止めようがないという恐ろしい事実への言及が足りないところにある。具体的には北極海とグリーンランドの氷の溶け具合が加速するのではないか(するはず)という危険性への示唆がない。物事は壊れ始めると雪崩を打ったように事態が悪くなるものである。この二つの地域はすでに回帰不能地点を越えている、あるいはそこまできかないにしても、このまま人類が二酸化炭素を出し続けると、きわめて近い将来、10年以内には越えることになるだろうという「脅かし」が書かれていない。


まだ見極めがつかない内にそのような予測は「科学者」としては、当然言えない。大胆な予測を出せる人は誰だ。科学者ではなく、「哲学者」が必要なのではなからうか。

(07. 02. 06. 篠原泰正)

**とにかく S V O の3役で構成**  
**基本的に主役 Sが先で相手役 Oがいる**

VIは、主役と相手役の間をつないだり、主役の状態を説明したり、主役から相手役へ働きかけたりする変容自在な仲介役の大黒柱です。

何んでも日本風の味づけ(醤油味)にして取り込み、理解したつもり、判ったつもりの、つもり族にならないようにする。モヤモヤは明確にする。



## 02.気象異変、あるいはビジネスチャンス

先月末(07年1月)、アメリカの太陽エネルギー協会(American Solar Energy Society)が「Tackling Climate Change in the U.S.」と題する200ページものレポートを発表した。\*興味のある方は同サイトにアクセスすればPDFでダウンロードできる。

副題は「Potential Carbon Emissions Reductions from Energy Efficiency and Renewable Energy by 2030」となっており、2030年までにカーボンの排出量を、現在の60から80%も削減しなければならぬ、そのためには、大掛かりなエネルギー消費の効率化と、再生可能エネルギーの一大展開が必要だと提言している。

気象異変への取り組みは、当然ながら、さまざまなビジネスチャンスを生む。今日現在、政府がボケーとしていても、明日には真剣に取り組まざるを得ないから、市場は俄然具体性を見せ始めることになるろう。

このレポートで取り上げられている分野を並べてみよう:

エネルギー消費の効率化では

- (1) 建物(buildings): 個人の住宅からオフィス、工場まで
- (2) 輸送(transportation):
- (3) 産業(industry):

発電や新たな燃料としては、以下の6分野となっている:

- (1) 集中型太陽発電(CSP Concentrating Solar Power)
- (2) 太陽光発電(フォトボルタック PV Photovoltaics)
- (3) 風力発電(Wind Power)
- (4) バイオマス(Biomass)
- (5) バイオ燃料(Biofuels)
- (6) 地熱発電(Geothermal Power)

太陽エネルギー協会のレポートだから太陽利用がメインであるのは当然であるが、その他の分野の可能性についても公平に分析されている。

水力発電(Hydro Power)に関しては触れられていないのは、米国においては、可能な箇所ではすべてとっくの昔に発電所が設置済みだからだろう。

個人的趣向でいえば、私が期待している海の潮の上げ下げや流れを利用した海

潮発電が無視されているのは、多分アメリカ大陸の両岸ともに干満の差も流れも強くないためだろう。

ともあれ、この協会のレポートが示す分野は、いずれもこれから大躍進する事業分野に間違いなく、ビッグチャンスである。もちろんこれ以外に農業やら水に関しても大きなチャンスがある。

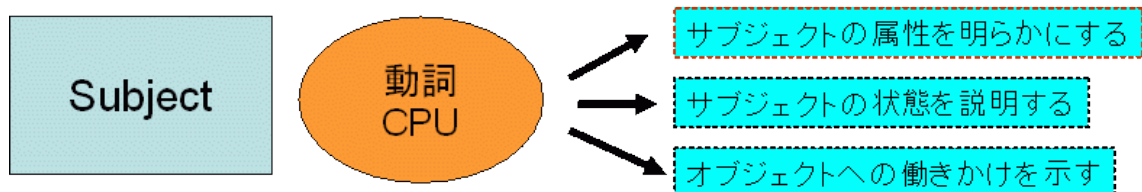
1年半前から時折眺めてきたこの気象異変関連対策を、もう一度整理しながら眺めていこうと思う。商品企画屋の性(さが)は直らないようだから、地球の危機に取り組む事業を「粋な企画」としてながめていくことにする。

もちろん、この反対のところには、今日の事態に無知で、いまだに高速道路を造ったり飛行場を建設するなどの「野暮な企画」が数多くある。これらについては、気が向いたときにオチョクルことにする。

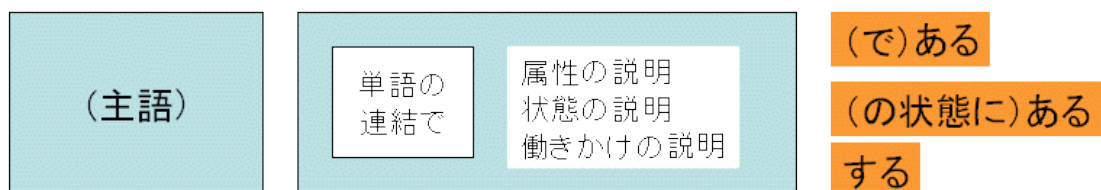
気象異変(Climat e Change)とピーク・オイル(Peak Oil)はコインの裏表であり、ようやく世界は事態の深刻さに気がつき、動きは始めている。ほとんどの分野において対策の知恵と技術を日本は持っているが、現在のようにボケーとしていると全部先を越されてしまうおそれもある。技術はあっても感性が鈍く、前へ突っ込む勇氣に欠けていては、果敢な欧米や特に中国に全部さらわれてしまうことにもなりかねない。

(07. 02. 14. 篠原泰正)

### 英語は動詞が中央処理装置



### 日本語は単語の連結で説明する



\*なんとなく分かったような気がする

### 03.水責め、あるいは今日も明日も晴れ

40年前、私が初めてアメリカ合衆国に足を踏み入れたのは、テキサス州のはずれにあるエルパソ(El Paso)という町であった。国境の河リオ・グランデ(Rio Grande; 日本語に訳せば「大川」、メキシコではRio Bravoと呼ばれている)の南側にあるシウダド・フアーレス(Ciudad Juarez)から市バスに乗り、国境の橋の真ん中にあるアメリカ税関でぎゅうぎゅう痛めつけられた後、ようやくたどり着いたのが(税関を出た後、橋の半分は歩いて渡った)エルパソである。西部劇でおなじみの町の名前で嬉しかったが、町のことを語るのがここでの本題ではない。

どうやら安ホテルに転がり込んで、地元の新聞を開いて驚いた。天気予報欄に「今日も明日も晴れ、連続晴れ日はこれで600何十日」とか書かれていた。雨がまったく降らない土地だったのだ。

本日、4月6日、国連の IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change) から本年2回目の報告書が発表されることになっている。今回のメインテーマは水不足(water scarcity)らしい。なんでも、赤道を真ん中にしての熱帯地方の上下に広がる亜熱帯地域に降る雨が、どんどん減っているらしい。米国の南西部(メキシコの北西部)、冒頭の町エルパソのあるテキサス西部からアリゾナ、ニューメキシコあたりは、既に7年も旱魃(かんばつ)が続いており、これが地球温暖化の影響のはしりであるとのことだ。

反対に、その上にある温帯地方(日本はここにある)の降雨量は増えるらしい。人間社会の格差だけでなく、自然においても、貧しいものはますます貧しくなり、金持ちはますます金持ちになるという法則が適用されるようだ。

It is a situation of the poor getting poorer and the rich getting richer when it comes to rainfall. (Washington Post)

このように地球規模で雨の降り方が変わるだけでなく、ヒマラヤやアンデスの氷河が急速に溶けているから大河の流量が減るといふ、水に関してはダブルパンチを食らう地域が広がる。また、米国南西部を流れるコロラド河などに水を供給しているロッキー山脈の積雪も、まい冬どんどん少なくなっているとのことだ。積雪も自然の貯水槽だから、山に雪がなければ夏の川は涸れてしまう。

ということで、IPCC 報告では、近い将来、10億から30億の人が深刻な水不足に悩まされると書かれているらしい。これは、まさに半端な数ではない。

前に、日本は、環境難民の大規模な受け入れ準備を始めなければならない、と

書いたことがあるが、どうやら本当にそうなりそうである。水の豊かな神州日本に大勢逃げ込んで来ると覚悟しておいた方がよい。

地球温暖化の結果として生じた天変地異 (Climate Change) のもっとも大きい厄災は、この、水が不足する、ということにまず集中的に現れることになりそうだ。水が無ければ、人間も動物も作物も生きていけない。住み慣れた土地を離れて、水があるところへ移動していくしかない。

日本列島は何人受け入れることができるのだろうか。

(07. 04. 06. 篠原泰正)

		主題・主体	属性・修飾・目的語	動詞	
骨組	属性・定義	サブジェクト Subject Matter は	このような属性	である	です
	状態 ・ 自立行為		このような状態 このような関係 このような動きを	にある している	あります
	働きかけ		何々を 何々に	する	します
詳細 説明	3W1H	whyなぜ、whereどこで、どこからどこへ whenいつ、howどのように			

## 04.6%の責任、あるいは知恵のオープンソース化

地球温暖化の主たる原因である二酸化炭素を、日本は毎年、世界の6%を排出してきた。多分、この30年間、この比率は変わっていないだろう。

このことは、気象異変(Climat e Change)に伴う地球破壊に6%手を貸してきたことを意味する。つまり、6%の責任(負債)を世界に対して背負っていることを意味する。この6%の責任の多くは、産業界などで中核であった現在40歳以上の世代が背負うべきものであろう。わっせ、わっせとやってきた「つけ」である。したがって、60歳定年になったから余生を楽しみますなんて、リタイアしてもらってはこまるのだ。行ってきた「オトシマエ」はつけてもらわねばならぬ。

話がそれそうなので、本筋に戻すと、6%の責任をどのようにして返済するか、その方法を考えなければならない。

その方法の一つは、この壊れていく地球で生き延びるために有効であろう、ありとあらゆる知恵を世界に公開することにある。日本の知恵を「オープン・ソース Open Sources」化して世界に提供する。

もうひとつは、環境難民を日本列島にわんさと受け入れることで、責任を果たすことであろう。今回発表された国連の IPCC 報告(Working Group II)を見ても、地球上には、人が住めなくなる地域が急速に増えてきそうであるから、日本は「罪滅ぼし」のためにも、難民を受け入れなければならなくなる。

本当かと思われる人もいると思うので、英語の勉強を兼ねて、この IPCC 本年2回目の(3回目は5月に出る予定)報告で何が予測されているか、文章をいくつか拾ってみよう。

### 1. Fresh water resources

In the course of the century,  
water supplies  
stored in glaciers and snow cover  
are projected to decline,  
reducing the water availability  
in regions  
supplied by melt water  
from major mountain ranges,  
where

more than one-sixth  
of the world population  
currently lives.

山の氷河や積雪の雪解け水に頼ってきた地域での水の供給は減っていくと予測される。その該当地域は世界の人口の6分の1以上を抱えている。

地球人口の6分の1といえは約10億人となるから、この一つの文章からだけでも、容易ならぬ事態であることが察せられるであろう。

自分の行動には責任をとるのが「サムライ」の基礎であるから、もし日本人がサムライなら、6%の責任はとらなければならない。日本を含む先進諸国が引き起こした天変地異のお蔭で生活の土地を失った人に、生活の場を提供することもその一つである。

(07. 04. 09. 篠原泰正)

**The local switch,**  
which stores the identification code

The code is inputted with the page.

↓ inputted with the page  
↓ in its subscriber file,

**adds** one or more destinations  
to the page

and

**transmits**

↓  
the page(s)  
to the local paging service  
by way of the lata switch.

ローカルスイッチの  
詳細、念押し説明

何を  
どこへ  
どうする

何を  
どこへ  
どうやって  
どうする

USP 5,438,611

加入者ファイルの中に  
ページと共に入力されている  
個別認証コードを蓄積しているところの  
**ローカルスイッチは、**  
一つあるいはそれ以上の宛て先を  
ページに  
**付け加え、**  
そのページを  
ラタスイッチの通路を通して  
ローカルページングサービスに  
**伝送する。**



## 05.知恵はできるのか

一天変地異に類(たぐい)するような事態に対して、

対策の知恵は出せるのだろうか。—

IPCC の報告

Asia

Glacier melt in Himalayas

is projected

to increase flooding,

rock avalanches

from destabilised slopes,

and

affect water resources

within next two to three decades.

ヒマラヤで溶けた氷河は、洪水やがけ崩れを増やし、そしてこれからの2-30年以内に、水資源に影響を及ぼす見通しである。\*「affect」は「is projected to affect」

This

will be followed

by decreased river flows

as the glaciers recede.

この(水資源の話は)、氷河が後退すると、河の流れが減ることから、もたらされる。

Fresh water availability

in Central, South, East

and Southeast Asia

particularly in large river basins

is projected to decrease

due to climate change

which,

along with population growth

and increasing demand arising  
from higher standards of living,  
could adversely affect  
more than a billion people  
by the 2050s.

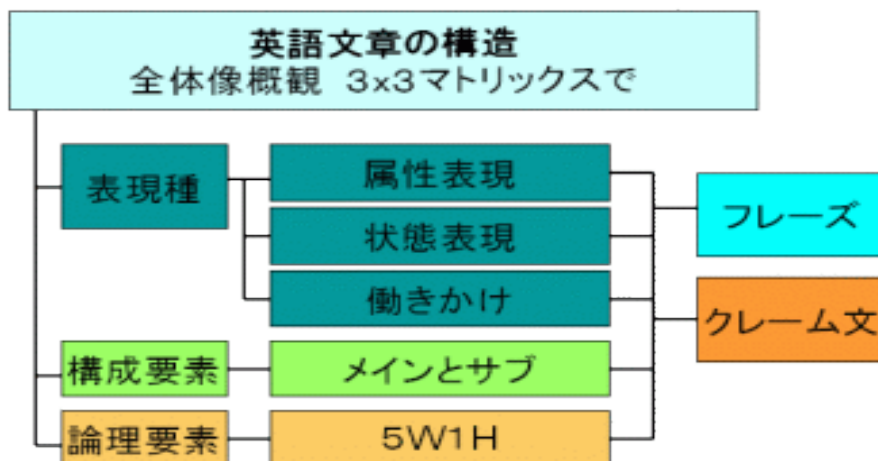
中央、南、東、東南アジアにおいて、特に大きな河の流域において、真水の確保は気象変異のおかげで減る見通しである。このことは、人口の増加や生活レベルの向上への要求とあいまって、2050年代までに、10億人以上の人たちにマイナスの影響を与えることになるだろう。

10億人以上の人たちが水不足に悩まされる、あるいは死にそうになると、一体どうということになるのか。ヒマラヤの氷河を溶かした温暖化の原因を作ったのは誰だ！、とまず一番近くに位置する日本が、地球環境裁判の被告席に座らされることになるかもしれぬ。

対策はあるのだろうか。私の乏しい知恵ではまったくお手上げである。ヒマラヤの水が10億人の人口を養っているのに比べれば、わが日本アルプスの水ではその100分の1も養えない小ささであろう。だから、日本が受け入れられる環境難民の数も、この途方もない10億という人口の前には霞んでしまう。

それでも、必死に対策しなければ、地球環境破壊の張本人として、日本人は世界の中を歩けなくなる日が来るのではないか。石を投げられて。  
(07. 04. 10. 篠原泰正)

### 篠原メソッドの 目からウロコを10枚はがす 講義構成



## 06.アジアの茶色い雲、あるいはヒマラヤの氷河

### —今、地球の上で—

「アジアの茶色い雲 (Asian brown clouds)」という言葉に、きょう初めて出会った。火力発電所からの煙、工場の排煙、農村のかまどの煙などが合わさって、南アジアからインド洋までの空を茶色に染めているのだそうだ。

この茶色雲が、温室ガスである二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) と重なって、この地域の地球の温暖化を更に強めていると、カリフォルニア大学サンディエゴの研究所 (Scripps Institution of Oceanography at the University of California-San Diego) が昨日 (8月2日、07年) イギリスの科学雑誌「ネイチャー (Nature)」に発表した。

大気中のCO<sub>2</sub>とこの「茶色雲」の影響をもっとも受けているのがヒマラヤの氷河 (Himalayan glaciers) であり、このままでは、50年以内に氷河はまったく消えてしまうと見積もられている。

このブログでもこれまで何度か書いてきたが、ヒマラヤの氷河は北と南に流れ出す9本の河の自然の貯水池であるから、氷河の消滅は夏季に放流するダムが無くなることを意味する。河に水が流れなければ、その水に頼って生きている10億以上の人々の生活を壊し、そこでの作物に頼っているその周りの多くの人々の「食」を脅かすことになる。

この研究分析の元になった調査は、昨年 (06年) 3月、インド洋のモルディブ (Maldives) で行われた。無人飛行機 (unmanned aircraft) —大型の模型飛行機— を同時に何機も飛ばし、それぞれ異なる高度で編隊を組み、北から流れてくる「茶色雲」の間を飛行して空中の物質を採集したのだそうだ。

CO<sub>2</sub>だけでも厄介なのに、その上大気汚染雲 (茶色雲) まで加わってしまうと、これはもう「グリコヤ」(お手上げという大阪ことば) という感じである。まあそういわずに、地球の崩壊を防ぐためにやれることは何でもやるしかないだろう。

(07. 08. 03. 篠原泰正)

## 07.第3世界への損害賠償

本日(08年1月21日ー日本時間22日)、カリフォルニア大学バークレー校(University of California, Berkeley)のリチャード・ノガード教授(Prof Richard Norgaard)率いるチームが、金持ち国が貧乏国に与えた生態環境上の損害(environmental damage)を見積もったレポートを米国科学アカデミー紀要(Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States)発表した、とイギリスのガーディアン紙が報じている。

調査対象となった金持ち国は米国、英国、そして日本の3国であり、対象の第3世界の諸国がどこまで含まれているのかは記事からは不明だが、与えた損害の総額は、現在第3世界全体の借金1.8兆ドル(約200兆円)の額を超えるものであるという。

金持ち国が自分達の豊かな生活を維持するために、第3世界の生態環境を破壊してきたことは既によく知られているが、今回の調査は次の6分野に絞って見積もられたという:温室ガス排出(greenhouse gas emissions)、オゾン層破壊(ozone layer depletion)、農業、森林伐採(deforestation)、魚の取りすぎ(overfishing)、マングローブ湿地帯をえびの養殖場に変えたこと(converting mangrove swamps into shrimp farms)。これらはいずれも、われわれ日本人には耳が痛い事項だから、調査対象に挙げられたことに文句は付けられないだろう。

私はこのブログの場で、日本は世界の石油の6%を消費しているから地球温暖化・気象異変に6%の責任があると書いた記憶があるが、今回の報告のように、ありがたくもかしこくも金持ち国の一人として名指しで挙げられると、これはヤバイ。石油消費の率で割ると、この悪名高き3国の責任は米国7、日本2、英国1といった割合になるだろう。もし、200兆円の損害を賠償しろと世界の裁判所で判決が出されたら、200兆円の2割、40兆円を拠出しなければならない。年間の国の税収と同額であり国家予算の半分という巨額になる。

さあ、どうする。

国のお金はこれまでの20年間で永田町と霞ヶ関のどら息子たちが全部ギャンブルですってしまったので国庫は空っぽである。ということは、金持ち国、実態はスッカラカンであるからお金で賠償金を払う余裕は無いことになる。

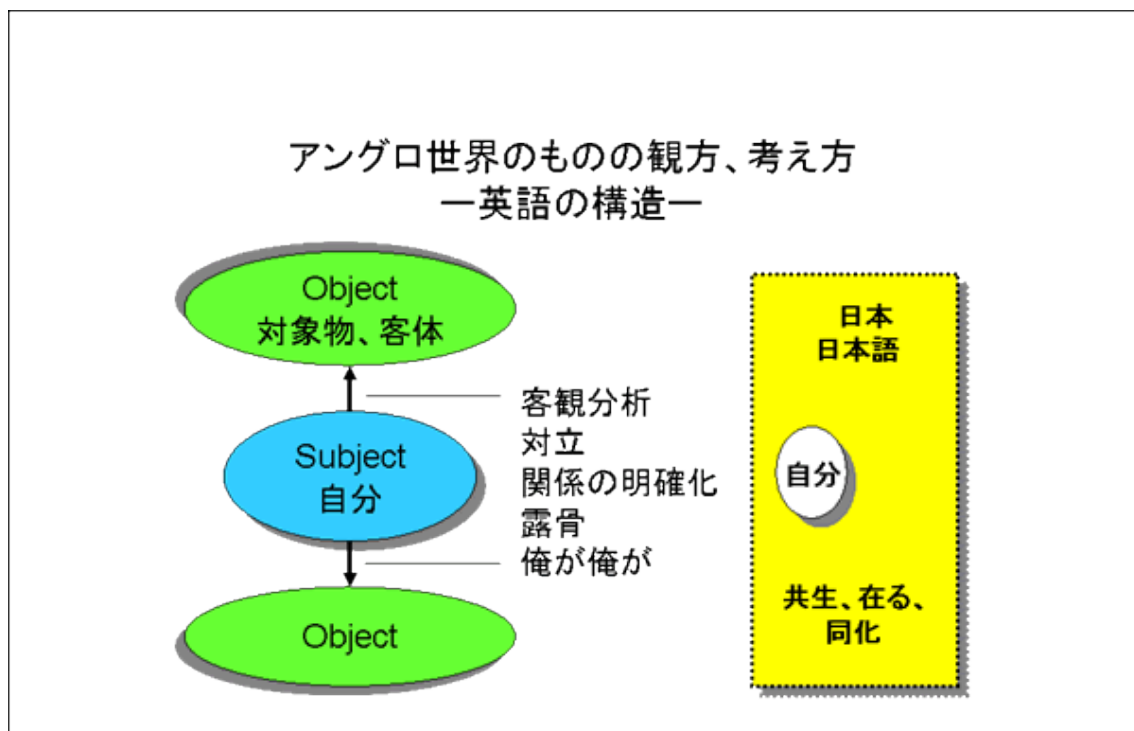
あるのは「知恵」だけである。

自然エネルギーを電気に変える技術から漏水を防ぐノウハウまで、マグロの養殖から水が少なくても育つ作物栽培技術まで、森林を回復するシステムからCO2の排出を抑える技術まで、ありとあらゆる技術とシステムとノウハウと技能を総動員して、それらを文書(英語で)にまとめ、ライセンス料を取らず、現地での技術指導も無償で提供するしか賠償の方法は無いのではなかろうか。私企業が無償で行うのは無理だから少なくとも開発投資と経費分ぐらいは政府に買い上げてもらう(税金を使う)ことになろう。国立の大学や研究機関はもちろんこれまで税金で研究してきたのだから、これは無償提供となろう。

われわれ日本人は、第3世界の犠牲の上で豊かな生活を維持してきたのであり、その生活のために気象異変を引き起こす一端を担ってきたのだから、償いはしなければならない。

60歳を過ぎて定年退職された皆さん。東京の下町探訪とか温泉めぐり何ぞでのんびりされては困るのです。蓄積してきた技術・ノウハウ・技能を全部出して、償いのために、そしてこれからの世界のためにもう一肌脱いでいただかないと困るのです。ホンマ、オンセンメグリ、ドコロジャオマヘン。

(08. 01. 22. 篠原泰正)



## 08.北の海からアメリカ南東部へ

北極圏はしばしば炭鉱のカナリアに例えられるという。米国NASAの気象科学者ジェイ・ズワリー(Jay Zwally)氏の言によると、"The Arctic is often cited as the canary in the coal mine for climate warming. Now as a sign of climate warming, the canary has died. It is time to start getting out of the coal mine."

鳥かごにカナリアを入れて炭鉱にもぐる。一酸化炭素が出てくると真っ先にカナリアがぼったりと行く。それ逃げ出せ、ということになる。北極地方の様相を見ると、既にカナリアは死んだ状態であり、炭鉱から逃げ出す時が来ているという。しかし、この地球上のどこに逃げ出せば良いのか？

昨年夏、グリーンランドで溶けた氷は5520億トンにのぼるという。老いも若きも1億の日本国民が総出でグリーンランドに出かけ、各人10トン積のダンプカーを運転して、切り出した氷を海岸まで運んで海に投棄する仕事を請け負ったとすると、各人が55回往復しなければ終わらないことになる。想像を絶する量である。

このグリーンランドの氷と北極海の氷の融解が大西洋の海流に大きく影響を始めているようだ。有名なメキシコ湾流(Gulf Stream)の変化で、米国南東部に雨が降らなくなっているらしい。南東部(South East)とは、South Carolina, North Carolina, Georgia, Alabama, Tennesseeなどの州を指す。

昨日(08年1月24日付けでAP(Associated Press)が報じるところによれば、これらの地方での原子力発電所(Nuclea Reactors, Nuclear Power Plants)が取水先の湖や川の水が少なくなったことで、稼動停止の危機に直面しているという。取水口がもう少しで水面に出てしまうという。言われてみれば、原子力発電所は猛烈に水を使う。水を熱して蒸気にしてタービンを回し、次いでその蒸気を急速冷却するためにまた水を使う。いふなれば水冷式発電所だ。全国で104ある発電所のほとんどは湖か川のほとりに建てられており、その内24箇所が猛烈なかんばつ地域にあるという。

メキシコ湾流が北の海で冷やされる度合いが少なくなって、大西洋をぐるぐる廻る力が弱まっているらしい。そのことが、北アメリカ大陸の降雨パターンを変えてしまっているらしい。今まで適当に降っていた地域で降らなくなり、これまでほとんど雨無しの地域にドカドカと降ったりする。ちょっとした海洋の変化が陸地の気象を大きく変えることになる。

原子力発電所が止まっても人間は生きていけるが、雨が降らなければ穀物が育たない。都市への水道も止まってしまう。世界一の大国、世界一の強国であるUSAの科学技術を総動員しても、降雨のパターンを元に戻す方策は無いだらう。日本に「知恵を貸せ」と来られても、こちらもお役には立てないだらう。

打つ手がなさそうな話ばかり連続して書いて来ているが、意図するところは、「事実を知ろう」ということである。事実をつかまなければ対策の立てようが無い。否、それどころか、対策を立てる必要性さえ感じない。今の日本はそのような「感じない」状態にある。このままでは、氷の融解と海流の流れを変えることはできないにしても、もう少し小さな課題には有効な数々の知的資源も活用されないままになる。

事実を知る、そして対策を考える。何度も何度もいうように、日本はこの地球の危機に立ち向かえる知的資源の宝庫、世界でもっとも豊かな資源に恵まれている地域である。事実を知らず、危機を感じなければ、それらの有用な知的資源は地下に眠ったまま活用されずに終わってしまうだらう。事実を知ろうとしないから、ぼけているから、太陽光発電や風力発電に研究開発の補助金も出ない。

炭鉱のカナリアはもう死んだのだ。このままぼけていたら、次は人間様がカナリアになる。

(08. 01. 25. 篠原泰正)

### 文章の分解・組み立て

## 5W1Hを常に意識する

概念、事実の論理関係を明快に記述すること

#### 3種の表現

誰は誰である  
誰は何している  
誰は誰に何している

+

いつ  
どこで  
なぜ  
どのように  
誰と

## 09.貝塚

前にもここで書いたと思うが、私はこの20年以上、上野の山から続く道灌山というところに住んでいる。近くの日暮里のお寺の正門には、上野戦争のとき、逃げ込んだ彰義隊を追っかけてきた官軍が撃ち込んだ弾痕が、今でも残っている。台地の上を走ってくれば上野からすぐに来られる距離である。

この、住んでいるあたりは、どこを掘っても弥生の住居跡が現れ、その下からは縄文の住居跡が現れる。住むのに適した土地だったのだろう。そりゃそうだ。この台地の東側、山手線の外側は一面海だったのだから、海の幸の取り放題だったのだろう。今はもうないが近くには貝塚も在ったらしい。現在の台地の高さは海拔16メートルであるから、当時、縄文時代、8千年ぐらい前は海拔10メートルぐらいだったのだろうか。

また、奈良時代に書き写された日本最古の地図を眺めると、この武蔵の国の東端（隅田川までのわずかな距離）から川向こうの下総の国は、入り江と川が入り組み、その間に台地がポコポコと浮かんでいるような図になっている。江戸時代から明治にかけても、治水工事が行き届かなかった時代には、この下総の国（今の埼玉県・千葉県の一部）は水郷地帯のようなもので、どの農家の納屋の天井にも舟が吊るされていたという。洪水時の備えである。

このように、そんなに遠い昔でもない時代には、海は深く内陸に入り込んでいたわけだ。なぜその海が引いていったのかは、私の乏しい知識では分からないが、海面の高さが変るということは、地球から見れば異常なことではないことになる。

アメリカのNASAの著名な科学者ジェームス・ハンセン(James Hansen)博士のレポートの中に以下のような言葉があるのを見つけた:

About 14,000 years ago,  
sea level rose approximately 20 meters  
in 400 years,  
or about 1 meter every 20 years.

海の水が上がるときには急速に上がるのだ。そのとき以来、縄文の時代には、海面はずっと下がっていったとしても、遺跡が示すように、上野から道灌山にかけては海に突き出した半島であったことになる。

今年になって、「The Big Melt」(07年10月発行)という背筋も凍るレポートをここで紹介したが、今年(2月・08年)になって、同じくオーストラリアの Carbon



Equity という団体が Friends of the Earth と共同で「Climate Code Red」という題名のレポートを出した。上のハンセン博士の引用はここから取った。

このレポートは、題名が示すように、地球温暖化への取り組みはもうまったく待ったなしですよ、と悲痛な声を上げている。ひと言で言えば、CO2の排出を「抑える」なんてものではなく、大気中のCO2の量を、1980年代半ばまでの300から350PPM(parts per million)まで落とさないと(現在は既に385PPM)、地球は救えない、つまり「抑える」のではなく、マイナス排出(negative CO2 emissions)が必要ですよ、ということである。昨年、11月に最終報告が出たIPCC(Intergovernmental Panel on Climate Change)の予測はあまりにも控えめであり、北極海、グリーンランドおよび南極大陸西岸の異常な氷の溶け方はデータに入っていないと警告している。事態はあらゆる世界の科学者の予測を超えて急展開しているという。

このレポートもハンセン博士も、今動けばまだ間に合う、と述べてはいる。しかし、われわれを含めて世界の先進諸国の国民と政府が、これはいかん、と動くだろうか。100%有り得ない。CO2の排出を劇的に減らすことは、劇的に経済生活を変えることを意味する。無理だ。数年の内に、ありとあらゆるビルの屋上から住宅の屋根まで太陽パネルで被えるだろうか。そこら中に風車発電塔を乱立させているだろうか。自家用車は自転車になり、タクシーは人力車になり、クロネコヤマトの車はすべて電気自動車になっているだろうか。無理だ。

もちろん、日本(人)が真っ先駆けてシャカリキにCO2排出ゼロに取り組む事はありえる。しかし、東と西の両大国にそのような動きは期待できないだろう。

まあ、それでも、ここは一丁、俠気(狂気?)を發して、頭と身体をフル回転させて、「男だ、ニッポンジン!」とやるしかないか。

上に上げたレポートは以下のアドレスから簡単にダウンロードできます。多くの人に読んでもらいたいから分かりやすい英語で書かれています。勇気のある人は、ぜひお読みください。

[www.carbonequity.info/](http://www.carbonequity.info/)

または

[www.foe.org.au/](http://www.foe.org.au/) (フレンド・オブ・アース)

または

[www.climatecodered.net/](http://www.climatecodered.net/)

(08. 02. 19. 篠原泰正)

## 10. 日本人の出番、あるいは明るい未来

タイトルだけから見ると、まことにノーテンキな楽天主義のかたまりのオッサンの言葉のようであるが、これから暑い中を、このタイトルのもとで過ごそうと思っている。

その概要。

### 1. 背景

(1) 気象異変によって地球が壊れていく。地球自然は、多分、もう回帰不能地点を越えており、今更何をしてもう元に戻らない。その中で、地球住民全員が、(歴史上)初めて全員が協力して厄災に立ち向かう「連帯」が生まれるだろう。

(2) 石油が無くなっていくことで、世界はようやくまともな社会を構築できるようになるだろう。例えば石油が無くなれば軍隊は動かさないで、戦争は無くなる。石油が無ければ、大金持ちは存在しえないので、経済的「平等」が広まる。また、豊かさとは物質的なものではなく、精神的なものに求めるべきだと、多くの人が気がつくようになる。

ひと言で言えば、地球規模で、まともな人間社会を構築するラストチャンスを、今、迎えている。

### 2. 日本人の役割

そのような地球環境の中で、日本人が果たすべき役割は極めて大きく、また果たせる能力を持っている。その果たし方は、(日本人の特性を生かして)物静かに世界に生き方の模範を示すことにあるだろう。なぜ、日本人が模範足りえるのか、その理由は以下のとおりである:

(1) 哲学でもなく、宗教でもなく、倫理でもなく、日本人は「美学」をその行動規範に持っている。精神美においては「名こそ惜しけれ」であり、自分の行動(仕事)に責任を持つ。さらに、この美学は、「造形美」と「様式美」を持つ。例えば、様式美は社会的秩序にもつながる。

(2) 「モノづくり」が大好きであり、これからの世界が必要とするさまざまな「モノ」を率先して作りだす意欲と能力があるし、蓄積が厚い。農業もまだあるし製造業もまだある。

(3) 「ムラ」の概念は、よきところを伸ばせば、その中が平等なかたまりとして、地球規模での「ムラ」にまで展開可能である。

(4) 伝統的な、自然と共に生きる「共生」の心はまだ失われていない。自然への優しさ、他者への優しさは日本人が誇るべき特性である。

(5) 「和魂洋才」の下に、この150年、東洋の心と西洋の技術(システム)の融合を目指して葛藤してきた体験を持つ。

(6) 「今」に生きる(ある意味でノーテンキな)民族であり、過ぎたことにこだわるよりも、今目前の課題に集中する特性がある。

(7) 元々、あまり「銭」に執着しない民族であり、執着する人を嘲笑する健全な心をまだ失わずにいる。

(8) まだ儒教のおかげか、「礼節」の国であり、他者に対して万事控え目であるから、世界から受け入れられる基本姿勢が残っている。

(9) 衰えてきたが、まだ健全なミドル(中流階層)層が分厚く存在している。

(10) 物質的に豊かになったのは、長い歴史上、この40年ぐらいだけであり、ほどほどに生きていく知恵と感覚は、社会の体験として、まだ失っていない。例えば、石炭も石油もなしに3千万人以上が穏やかに暮らしてきた江戸時代は、まだついこの間、150年前の話である。

### 3. 本当に日本人がリーダー的存在でありえるのかーその検証(1): 西洋500年史

西洋世界は、世界と社会を上と下に区分する世界観(社会観)の下にこの500年経営されて来ており、そのものの見方と経営の方法(及びシステム)は、今や行き詰まっている。そのことは今の世界を眺めれば明らかである。

### 4. その検証(2): 日本2千年史

日本の歴史は、公家衆の支配と武家衆の支配の交互で編成されてきており、武家衆の支配時には日本は世界に窓を開けた存在になりうることを示されている。

5. しかし、上に揚げたリーダー的存在になりうる理由は、ポテンシャルを示したもので、このままでは、物静かに世界に模範を示す存在となりえない。そこには、大きな改善努力が必要である。

(1) ポテンシャルを現実の力に顕在化するためには、上に揚げた要素の回復(復興)が必要となる。

(2) 声高に叫ぶ必要は無いが(やれといわれてもできない)、模範を示すために

は、「論理的」に考え、表現する力を、相当に基礎部分から養う努力が必要である。

## 6. リスク

これからの10年は、まともな世界を構築できるか否かのスリルに満ちたステージとなるが、このラストチャンスを生かせるかどうか、極めてリスクも大きい。

(1) 下手すりゃ、石油資源の奪い合いが生じる

(2) 世界の中と国内において、富の一極集中が加速される

これらは、支配層の(銭の元が消えていく)あせりと、せっかく獲得した物質的豊かさから没落していく中産階級のあせりによるヒステリー状態が生じると、世界的に起こる危険性がある。例えばナショナリズムが煽られるなどもその一つの表れとなろう。

冷静に見れば、まともな世界にいける可能性は3割ぐらいしか無いが、3割も可能性があるのだから、やるしかないだろう。

地球温暖化の暑熱に早くも頭をやられたか、と思われるかもしれないが、以上が、この夏にメモしておきたい概要である。

(07. 07. 16. 篠原泰正)(2009年2月24日.補筆 篠原泰正)

## なぜ日本人は明快な文書を作れないのか

01. 露骨にものを言うことをはばかりな心情が働く
02. 文書を重視する文化が無い
03. 他者を説得する気迫に欠ける
04. 明確に断定して、結果責任を取るのが怖い
05. 文化、信条、民族を異にする他者への理解が薄い
06. 論理的に物事を進める人は嫌われる
07. 論理的思考と表現に関する訓練を受けていない
08. どのように文書を構成し記述するかの訓練を受けていない
09. 文化に基盤を置いた日本語と文明事項を記述する日本語が頭の中で区分されていない
10. 外国語能力が低いため、母語を比較検討することができない
11. 日本語の構造が重構造のため明確に書くのに適していない
12. 難しく書くことが「えらい」と思っているバカもいる
13. 対象外国の知識(ルールや民族性など)が欠けている